第６学年　国語科 学習指導案

Ⅰ　**単元名**　自分の大切にしたい名言を紹介しよう！
　　題材名　「伝えよう，大切にしたい名言」

Ⅱ　単元の目標

・目的に合わせて，読み手が興味をもてるよう自分の経験と考えを入れ簡潔に書く。
【第５学年及び第６学年　B 書くこと（１）ア】
・伝えたいことを明確にして，聞く人の印象に残るように話の組み立てを工夫して話す。
【第５学年及び第６学年　A 話すこと聞くこと（１）イ】

Ⅲ　単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	言語についての知識・理解・技能
・話の組み立てを工夫することで，スピーチがより効果的なものとなることを感じながら話したり，話し方を振り返ったりしようとしている。	・話したい事柄を整理し，聞く人の印象に残るように場に応じた適切な言葉遣いで話す。【（１）オ】	・自分が選んだ名言について,自分の経験や考えを入れて文章を書いている。【（１）ア】	・スピーチをする際の技術の効果を実感し，その技術を使うことができる。【イ（ア）】

Ⅳ　単元・題材と指導の構想

１　単元・題材について

小学校学習指導要領・国語の第５学年及び第６学年「A 話すこと・聞くこと」の指導事項「イ　目的や意図に応じて，事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら，場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。」と「B　書くこと」の指導事項「ウ　事実と感想，意見などと区別するとともに，目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。」とを関連付けて指導を行うことを意図したものである。その際，「A 話すこと・聞くこと」の言語活動例「ア　資料を提示しながら説明や報告をしたり，それらを聞いて助言や提案をしたりすること。」と「B　書くこと」の言語活動例「ウ　事物のよさを多くの人に伝えるための文章を書くこと。」とを組み合わせた複合単元を構想し，指導の効果を高めることを目指す。

単元を貫く言語活動として，「それぞれが心に残った名言を選び，クラスの名言集を作るという活動と，選んだ名言についてのスピーチをする」ことを位置づけた。名言集は学級の仲間と共有し合うこととともに，保護者や先生方に配り読んで頂く。そして，スピーチは校長先生を招待し，スピーチを聴いて頂く。名言集やスピーチを通し，自分たちの成長を感じ，喜んでもらえるような成果を目指して活動する。

まず，本で調べたり，取材をしたりして名言を集める。その中で一番心に残った名言を選ぶ。その選んだ名言について次の二つの活動を行う。

一つが，自分が選んだ名言の紹介文を書く活動である。自分の心に残った名言を学級の仲間や仲間の家族に知ってもらうために，自分の経験や考えを入れながら心に残った名言を紹介する文章を書く。そして，その紹介文を集め，クラスで名言集を作る。

この活動を通して，事実と自分の経験や考えとを区別しながら書くこと，そして，目的をもって表現を工夫して書くことの技能を伸ばしたい。

もう一つが，自分が選んだ名言についてスピーチを行うという活動である。聞き手の印象に残るように話の組み立てを工夫しながら自分が選んだ名言を紹介する。

この活動を通して，聞き手の印象に残るようなスピーチにするための話の組み立てる技能を伸ばしたい。

子どもたちは今まで声の大小，高低，適切な間などのスピーチの基本技術を学んできた。これらの技術の良さは理解しているが，まだ身に付いてはいない。技術は繰り返し練習することで身に付く。そこで，自分の選んだ名言についてスピーチをするという実際の活動をしながら，技術を身に付けるための練習の場にもしていきたい。

そして，単元全体を通し，仲間と協同で学ぶ単元構成の工夫を行う。書く活動も話す活動も個人で行うものであるが，その活動を協同で行うグループを編成する。紹介文を書く活動でもスピーチする活動でも各自の表現がよりよいものになるように助言し合う。仲間の表現の向上に喜びを感じたり，仲間の表現を向上させることが自分の力の向上にも繋がるということも価値付けたりできるようにしたい。

２ 指導の構想

単元の目標を達成させるためには，子どもたちが主体的に学習に取り組めるようにすることが大切である。そのために単元の始めに，単元の活動について「やりたい」「やろう」と思えるような工夫をしたい。その手立てとして，次の二つを行う。

① みんなで学習しようという意欲付けをする。

この単元を通し，学級の仲間の思いをよく知り，そして，みんなで成長していこうというチームの意識をもたせる。名言を紹介する文やスピーチは，その子の経験や思いが表れる。この活動を協力し合いながらすることで，学級の仲を更に深め，力を高め合う場にしようという思いをみんながもてるような話を単元の導入で行いたい。

② 目標の構造を示す。

単元の導入では，教師が書いた名言の紹介文を読ませたり，教師がスピーチを行ったりする。モデルを示すことで，発表の内容面と表現の仕方の両方についてイメージをもち，どのように取り組んで行けば良いのかを考えられるようにする。そして，下記のような目的の設定の型を提示して子どもたちが目標設定をすることができるような環境を作る。

＜誰＞に＜どうなってほしい＞から＜なに＞を＜どうする＞

読み手／聞き手の立場に立ち＜どのように＞紹介文を書く。／スピーチを行う。

この単元では，三つの活動場面を設定している。（１）名言を調べ，心に残る名言を一つ選ぶ活動，（２）自分の選んだ名言の紹介文を書く活動，（３）自分が選んだ名言についてスピーチを行う活動である。これら三つの活動の構想について，以下に記述する。

（１）名言を調べ，心に残る名言を一つ選ぶ活動

学級で名言を話題にしたときに反応する子は少ない。子どもたちは名言を意識して生活をするようなことはあまりしていない。名言は子どもたちの生活とは離れているのが実態である。そこで次のような手だてをとる。

① 名言に慣れさせておく。

５月から，学級通信のヘッダー部分に週変わりで名言を載せている。毎号名言に触れることで，意識が高まることを期待している。

② 自分の経験や思いと重なる名言を選ぶように働き掛ける。

名言は，自分の経験や思いと重なった時に心に残り，人生の支えとなる。選んだ名言を大切にしていくためにも，「何となく心に残ったから」ではなく，自分の経験や思いと重なる名言を選ぶように働き掛けたい。

また，紹介文を書いたり，スピーチをしたりする時には，この観点で選んでおくことが重要になる。

③　複数の資料を用意する。

できるだけ多くの資料を用意し，自分の心に残る名言を選べるようにしたい。そのために，学校司書と連携し，学校の蔵書に加え新潟市の図書館から学校貸し出しを受けるように手配する。そして，学級文庫に名言集コーナーを作り，１ヶ月前から名言集を読む環境を作る。

（２）自分の選んだ名言の紹介文を書く活動

①　作文の技を意識させる。

５年生の時から作文技術を指導してきた。16 の作文の技術は学習指導要領を基に，中学校教員である堀の作成した「20 の作文技術」（堀，2001　Ⅶ参考文献※１）を小学生向けに独自に編成した。

すでに全ての技を指導してあり，子どもたちは作文の技の良さを理解している。しかし，その技術を目的に合わせて選択し，実際に使えるところまでには到達していない。技術は意識をして使うということを繰り返すことで身に付いていく。そこで，作文技術を意識して使えるようにするため，作文技術を一覧表（「作文の技マスターカード」）にし，児童に渡している。一覧表には自己評価のためのチェック欄を作り，定着度合いを確認できるように工夫している。

本単元でも，このマスターカードを見ながら，自分で必要だと思う技を使い，相手に思いを伝えられる文章を書けるようにする。

②　共同編集作文グループを編成する。

目的に合った文章を書くことができる児童を育成するには作文の共同編集という手だてが効果的である（片桐・西川,2005　Ⅶ参考文献※２）。

作文の過程を「課題設定や取材―構成―記述―推敲―交流」とした場合，一般的な作文の学習において，児童間の交流が設定されるのは推敲や発信の段階が多い。しかし，児童のつまずきがあるのは，全ての過程である。一般的な作文の学習方法では，「課題設定や取材―構成―記述」の段階でつまずきがあっても，相談したり，助言を受けたりすることができるのは教師からのみである。また，推敲・発信の場面で助言を受けても，すでに文章が出来上がっているため，文章の構成や文章の題材自体など大きな変更は難しい。

以上のことから，取材・構想の段階から相談したり，助言を得たりすることができれば客観的な判断のもと作文を書くことができるようになり，より目的に合った文章を書くことができるのではないかと考えた。そこで，グループ内でお互いの作文に責任を負い編集し合う共同編集グループを編成する。全ての過程において，相談し合い，よりよい作文にしようとする協同の体制を作りたい。

（３）自分が選んだ名言についてスピーチを行う活動

子どもたちが自信をもって人前で話すための力を身に付けさせたい。そのための単元の構成をするにあたり，重要だと思うのは，次の５点である。

①スピーチをする目的を意識するための手だてをとる。
②スピーチに必要な言語技術を選び出し，指導する。
③グループのメンバーでお互いのスピーチを助言し合うようにする。
④自己モニターをし，自分のスピーチを客観視できるようにする。（iPadを使用する。）
⑤毎時間振り返りを行い，スピーチ力向上の過程やスピーチすることを価値付けできるようにする。

この５点を単元に位置付け，単元を構成する。

①　「スピーチをする目的を意識するための手だてをとる」について

※前述，単元の導入の通り。

②　「スピーチに必要な言語技術を選び出し，指導する」について

スピーチにおける必要な言語技術を一覧表（「スピーチマスターカード」）にし，児童に渡す。一覧表には自己評価のためのチェック欄を作り，定着度合いを確認できるように工夫する。

言語技術は，学習指導要領を基に，堀と「研究集団ことのは」が作成した「教室プレゼンテーション 20 の技術』（堀裕嗣，研究集団ことのは，2002　Ⅶ参考文献※３）を小学生向けに独自に編成する。この技術を学び，その価値を実感できるようになることを目指し，授業内に「技のコーナー」を設けるとともに，できるだけ，毎時間の始めに練習を行うようにする。

③「グループのメンバーでお互いのスピーチを助言し合うようにする」について

スピーチの姿は自分では見ることができない。そのため，自分のスピーチの状態を自己分析することは難しい。そこで，紹介文を書く活動同様に相互演出グループ（相互編集グループと同じ）を作る。お互いのスピーチの内容や方法について助言をし合い，よりよいスピーチにしていく。

④　「自己モニターをし，自分のスピーチを客観視できるようにする（iPad を使用する）」について

③に示したように相互演出グループを作り，お互いのスピーチに助言し合う。これは，書くことの相互編集作文と同じスタイルである。しかし，スピーチには作文と違うことがある。それは，スピーチは行動であり，作文のような具体的な物がないことである。この性質により，あるスピーチに関して議論する場合，そのスピーチに対して，お互いの認識に差が生じてしまうという問題が生じる。認識の差によって深まりが出なくなってしまったり，議論に行き違いが生じてしまったりする。そこで，このような問題点を改善するため，iPad でスピーチを録画し，それを基に客観的な話し合いができる環境を整えるという手だてをとる。この手だてをとることで，スピーチをした子どもとグループの子どもとが具体的な姿をもとに話し合うことができる。

その際，前田・益子が明らかにしたように（前田・益子，2007：217　Ⅶ参考文献※４），自己モニターの回数が少ないと逆効果が生じてしまう（モニターの回数が少ないと自信を失う。４回以上の録画・視聴で意欲の向上に優位性が生じる）可能性が高いため，十分な練習時間を確保し，試行錯誤する環境を保証する必要がある。

一方，実質的には時間の問題がある。現行のスピーチ単元では，子どもたちが練習に時間をかけられるように時間配分は設定されていない。工夫をして時間を調整しても限界がある。そこで，年間の計画を考え，年に２回あるスピーチ単元の結び付き強めることでこの問題に対応する。７月に行ったスピーチの単元では，３回の録画を行った。この単元では，スピーチ活動の最初に前単元での記録を振り返ることでスピーチの学習のつながりを意識させる。この工夫により練習の時間の問題を解決し，繰り返し自分の姿を見る環境を整えたい。

⑤　「毎時間振り返りを行い，スピーチ力向上の過程やスピーチすることを価値付けできるようにする」について

毎時間，授業の最後に振り返りを行う。振り返りの方法は，「スピーチマスターカード」とノートでのまとめ作文，そして，練習時は iPad での録画という方法を使う。毎時間確実に振り返りを行うことで，子どもたちが自分の学習を価値付けし，次時の学習への意欲の向上につなげたい。

Ⅴ　単元(題材)の指導計画（全 15 時間）

時	学習のねらい（○）と主な活動内容（・）	評価				
		関	話	書	知	評価規準
1次（1時間）	○ 学習の流れを確かめ，単元の目標を設定し，共有する。 ・ 教師の例示を見てゴールイメージをもつ。 ・ 学習の流れを確かめ，目標を設定する。 ・ 名言集づくり，スピーチ発表会の役割分担をする。	○			○	・学習の目標を設定している。
2次（2時間）	○ 名言を調べる。 ・ 複数の本を読んだり，身近な大人にインタビューをしたりし，心に残る名言を集める。 ・ 自分の経験と重なり心に残る名言を選ぶ。 ・ みんなの選んだ名言をグループに分け，それを見出しとする。				○	・複数の本や辞書等を読み，必要な情報を選んでいる。
3次（4時間）	○ 心に残った名言を選んで，名言集を作る。 ・ 自分の経験とつながるものやこれからの生活に生かしていきたいと思う名言を選ぶ。 ・ 自分が選んだ名言について，自分の経験や考えを入れて文章を書いている。			○	○	・自分が選んだ名言について，自分の経験や考えを入れて加えて紹介文を作成している。
4次（8時間・本時5時間目）	○ スピーチの原稿を作る。（1） ・ 話したい事柄を整理し，聞く人の印象に残るように工夫して話を組み立てる。 ・ お互いに助言し合い，修正を加えていく。 ○ スピーチの練習をする。（1） ・ 前単元でのスピーチの動画を見る。 ・ 聞く人の印象に残るようにするにはどうしたら良いか考え，発表の改善を加えていく。 ・ 仲間と助言し合う。 ○ リハーサルを行う。（2） ・ 聞き手の印象に残るように工夫をしながらスピーチを行う。 ・ 相互評価を行い，フィードバックする。 ・ 自分たちの課題を見付け，次の学習の課題をたてる。 ○ スピーチの練習をする。（1） ・ 仲間と助言し合いながら練習をする。 ○ 校長先生を招待してスピーチの会を開く。（2） ・ スピーチをする。 ・ 校長先生から感想を頂く。※校長とは事前に打ち合せをし，スピーチの内容・技術両面から評価して頂くようにする。 ○ 学習の振り返りを行う（1） ・ 最初の発表の様子と最後の様子を比べる。 ・ 発表のコツ３か条をまとめる。 ・ 更によいスピーチをするために力を入れたいことを書く。		○		○	・話したい事柄を整理し，聞く人の印象に残るように話の組み立てを工夫している。 ・聞く人の印象に残るようにするには，どこをどのように修正すればよいかを助言したり，よりよいスピーチをするためには具体的にどうすればよいかを考えて提案したりしている。 ・相手の印象に残るスピーチができるように工夫し技能を向上させている。

Ⅵ　本時の計画（12 時間目／全 15 時間）

１ 本時のねらい

相手の印象に残るスピーチをするために，グループで助言し合ったり，録画した映像を見たりしながら練習することを通して，アイコンタクトや間などのスピーチの技能を向上させることができる。

２ 本時の構想

本時は，相手の印象に残るスピーチをするための技能を向上させることをねらいとする。

前時までに作った原稿をもとに，名言を紹介するスピーチの練習をする。相手の印象に残るスピーチをすることを目指し，工夫をしながら練習し技能を向上させる姿を期待している。

そのために，以下のような手だてを講ずる。

①スピーチ力向上のための技術を指導しておく。

前のスピーチ単元や，前時までの技のコーナーで，児童はスピーチの技術について学んできている。スピーチ技術の良さを知っていることで，スピーチを良くするためにスピーチ技術を活用することができる。また，児童はスピーチの技術の一覧表を持っている。児童はその一覧表を使うことで，自分のスピーチに使う技術を再確認したり，必要な技を新たに加えたりできる。

②仲間と学び合える授業設定をする。

お互いがそれぞれのスピーチを演出し，そのスピーチの出来不出来に責任を負い合う相互演出グループを作る。お互いがスピーチの練習の様子を見せ合うことで，聞く人の立場に立ったアドバイスをし合うことができる。グループのメンバーそれぞれのスピーチが良くなるように協力し合うようにしていきたい。

③iPad を使って自分のスピーチを可視化できるようにする。

子どもたちがスピーチを上達させたいと思えるような教材の提示を行う。iPad で録画した自分のスピーチの現状を見るようにすることで，もっと上手にスピーチをしたいという思いを喚起し，意欲的に練習に取り組むようにしたい。そして，本時の後半で自分の姿を再度見ることで，練習の成果を振り返りとともに，更に向上したいという思いを引き出したい。

３　本時の展開

学習活動	教師の働き掛けと予想される児童生徒の反応	■評価・○留意点
導入 1　録画した自分のスピーチ動画を見て，本時の目標を設定する。	T1 前の時間では，スピーチの会のリハーサルを行いました。私たちは校長先生に「成長したな～」って思ってもらえるような，聞く相手に名言の良さや自分の思いがしっかりと伝わるスピーチの会を開くのが目標でしたね。 リハーサルでは，三組の三つの課題「アイコンタクト」「スピード」「間」のできはどうでしたか？また，個人で立てた課題のできはどうでしたか？今日は，これらの課題をクリアし，本番に臨めるように最終練習をしましょう。	

	練習に入る前に，課題を立てましょう。課題はできるだけ具体化していきます。前回の録画を見たい人は見てもいいですよ。 C1 私は下を見て話しているから，顔をあげて聞く人の方を見て話せるようにする。 C2 僕は，間を全然意識していなかったから，間をとる工夫をする。 C3 私は，資料をみせるタイミングや持ち方が悪いから，そこを直す。 T2 今日の自分の課題をノートに書きましょう。課題を書いたら，班の仲間と見せ合います。 T3 今日の活動の流れを確認します。黒板を見ましょう。 ＜本時のメニュー＞ 1 iPad を見て，課題を立てる【8 分】 2 本時の流れ説明【3 分】 3 グループ練習（場所：自由）【7 分】 --------鈴が鳴る--------- 4 録画（場所：自由）【10 分】 5 班で振り返り（場所：自由）【10 分】 ・ 録画を見ながらわいわいと ・ 遠慮なく助言する （時間があれば練習） --------鈴が鳴る--------- 6 全体で振り返り（場所：教室）【7 分】	○情報を可視化するために次のことをする □本時のながれ，課題は板書をしておく □単元の流れは大型 TV に提示しておく
展開 2 聞く人の印象に残るようなスピーチになるように練習をする。	**＜課題＞名言の良さや自分の思いが伝わるスピーチになるように練習しよう** **□アイコンタクト □スピード □間** T4 グループで協力し合いながら，よりよいスピーチになるように練習し合いましょう。	
	C5 顔を上げてスピーチしてみるから見てくれる？ C6 顔があがっていたよ。でも，同じ方をずっと見ていたから，色々な方を見て話すともっといいと思うよ。 C7 間を取れるように一人で何度も練習しよう。 C8 資料を見せるタイミングを変えたから見て。 C9 タイミングよくなったと思うよ。 T5 鈴を鳴らす。 C11 よし，録画をしよう。ぼくがとるよ。 C12（スピーチをしている子がアイコンタクトができるように手を振って意識を促す） C13 上手くなっていたよ。しっかりみんなの方を向いていたね。 T6 鈴を鳴らす。	■相手の印象に残るスピーチをできるように工夫し技能を向上させている。（観察・iPad）
終末 3 練習の成果を振り返る。	T7（全体の課題に対する確認をする。）今日の学級での課題である「○○」でした。今の時点で「○○」が◎○という人は手を挙げましょう。 みんな,課題に向けて頑張りましたね。「○	■相手の印象に残るスピーチをできるように工夫し技能を向上させている。（振り返りノート）

	○」の技術がとても上手になったなあと思いながら私も練習の様子を見ていました。 今日の振り返りをします。今日の課題に対して，どうでしたか。次のように振り返りを書きましょう。 ■ 学級の課題・自分の課題に対して，◎・○・△・×の評価をする。 ■ 課題に対して振り返りの文を書く。 ■ 次のスピーチの課題を書く。 C （振り返りをノートに書く） □アイコンタクト◎ □スピード○ □間△ □ツール◎ 今日は，アイコンタクトを意識して話すことができた。前回は前ばかりだったけど，iPad を見たら，顔を振ることできていた。 また，この前○○さんが紙を使ってキーワードを出していたのが良かったので，自分もやってみた。班の人が分かりやすいって言ってくれた。やってよかった。 ただ，間を意識できなかった。名言の後に間を入れようとは思っていたけど，あせって間があいていなかった。 次は，間を意識して，名言の良さが伝わる最高のスピーチにしたい。	

４ 本時の評価

（評価方法） 観察・振り返りノート

（目指す子どもの姿）

相手の印象に残るスピーチができるように工夫し技能を向上させている。

A ：学級の課題と自分の課題に対する技能を向上させている。

B ：学級の課題に関する技能を向上させている。

Ⅶ 参考文献

※１ 堀裕嗣：「作文技術」で論理的思考力を培う，年報いわみさわ,22 号，33-35,2001

※２ 片桐史裕・西川純：高校生の作文共同編集における相互交流と表現の確定について,教育実践学研究，第７巻第１号，9-17,2005

※３ 堀裕嗣･研究集団ことのは:教室プレゼンテーションの２０の技術,明治図書,2002

※４ 前田康裕・益子典文：小学校国語科スピーチ学習におけるハードディスクレコーダー活用の効果，日本教育工学会論文誌 31(Suppl.),217-220,2007